

【論文要旨】

本論文では、明治期における昔話の研究として、主に、明治二十七（一八九四）年～明治二十九（一八九六）年にかけて刊行された巖谷小波の『日本昔噺』叢書（全二十四編）についての分析を行った。『日本昔噺』は、日本の有名な昔話を一定の様式に書き直して残すという企画の下に刊行された叢書である。巖谷は、古くからある昔話などをそのままの形で『日本昔噺』に収録するのではなく、独自の改変を加えて再話を行っている。本論文では、巖谷の昔話の再話方法にどのような特徴があるのか、また、その特徴はどのような要因によるものであるのかを明らかにし、明治期における『日本昔噺』の位置づけを探ることを目的とした。

第一章では、巖谷小波及び『日本昔噺』叢書の情報の整理と、『日本昔噺』の先行研究概況をまとめ、今までの研究動向を把握した。

第二章では、『日本昔噺』のうち『御伽草子』に同様の話が見られる、第六編「大江山」、第十一編「物臭太郎」、第十八編「浦島太郎」、第十九編「一寸法師」、第二十二編「猫の草紙」の五作品を取り上げ、『御伽草子』との本文比較を行った。比較の際、『日本昔噺』では『御伽草子』の話をどのように改変し再話を行っていたのか、その特徴を分析し巖谷の再話の傾向を見出した。

第三章では、第二章でまとめた『日本昔噺』の再話の特徴が、どのような要因によるものであるのか、巖谷の再話の意図、明治時代の社会状況と教育、明治時代の思想などの観点から考察した。また、その上で、明治期における『日本昔噺』の位置づけについても考察を行った。